

種なし巨峰・ピオーネの整枝剪定について

平成26年12月
果樹技術普及センター

1. はじめに

種なし巨峰・ピオーネにおいて、重要なことは、適正な樹勢を維持することにある。
 整枝剪定は、収量調節と樹勢のコントロールの一手段であり、後に続く房づくり・摘房・摘粒・新梢管理等を一貫して適正に行う必要がある。

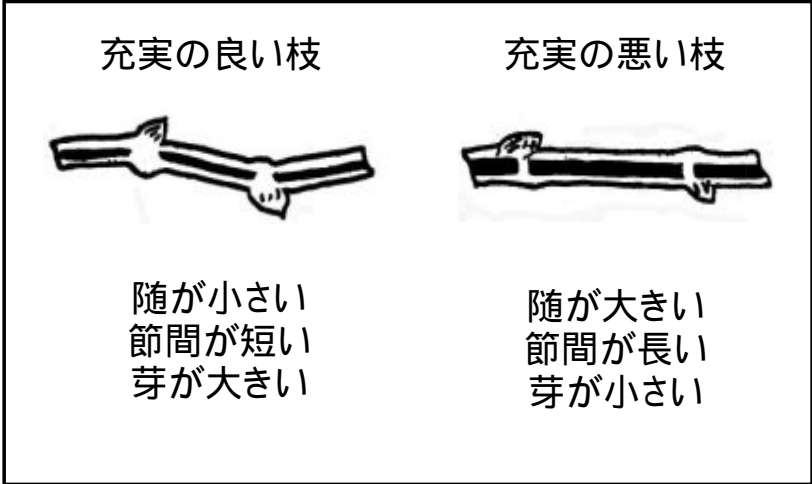
2. 樹相診断

樹相診断に当たっては、生育期間中に行う樹相診断が最も有効な方法であるが、すでに落葉してしまった冬期は、枝の伸長量と登熟具合で判断する。

表1 結果母枝の状態

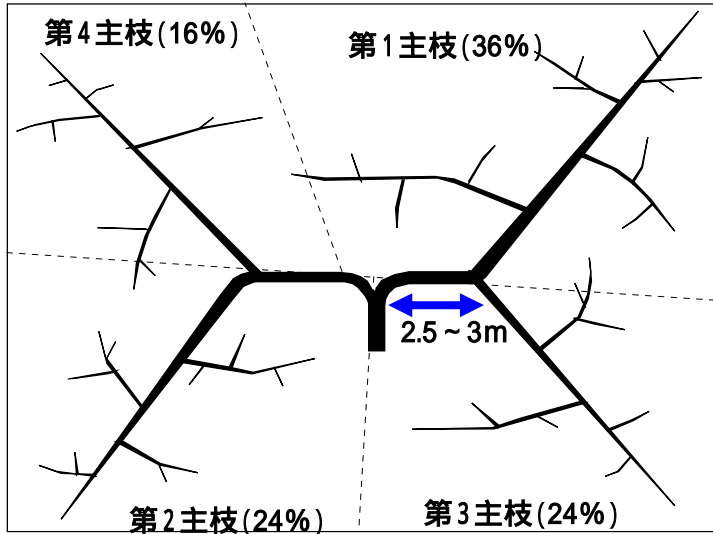
3 m以上で節間が長く、副梢が多い枝……………最強の枝
2 m程度で副梢が発生している枝……………強い枝
1.5 m前後で伸長停止が早い枝……………中庸な枝
1 m前後で伸長停止が早い枝……………やや弱い枝
50 cm以下で細い割に随が太い枝……………弱い枝

この枝は、登熟が悪い。この枝が最も良く、と次いでが登熟良好である。また、は萌芽が遅れて不揃いとなりやすく、は活力ある新梢が得られにくい。
 巨峰・ピオーネでは、の枝の樹が良好である。



3. 整枝方法

種なし栽培においても、基本はX型自然形整枝でよいが、樹形にとらわれすぎないように注意する。



4. 縮伐・間伐

園が密植状態にあると強剪定になり、徒長枝の発生を促して棚の作業を暗くするため枝の登熟が悪くなる。そのため、剪定作業を始める前に必要があれば縮伐・間伐を実施する。

5. 剪定の考え方

種あり栽培に比べると、一般にやや強めの剪定が良いとされているが、決して強剪定が良いということではない。切り返しは強めでも、枝数は種あり栽培とほぼ同じである。
 ここで、心がけることは、1.5~2.0 m前後で伸びの止まる小指程度の太さの充実した結果母枝を中心に残すことが重要である。

6. 枝ごとの処理方法

- 主枝はまっすぐに伸ばす。主枝・亜主枝・側枝のふところを広くとる。
- 亜主枝・側枝の数を少なくする。
- 追い出し枝になるような枝は、発生基部から整理する。
- 返し枝を活用する。
- 芽数を減らす場合、剪定量が同じであれば、結果母枝の数を減らすよりも、結果母枝の数はそのまま、長さを短くする。
- 種あり栽培のようなハサミ枝は原則として置かない。

表2 結果母枝の切りつめ程度と結果母枝数の目安

枝の強さ	芽数	残す本数(3.3m ²)	残す本数(7尺5寸間)
人差し指程度の太さ	8~10芽程度	3~4本	5~6本
小指大の太さ	5~6芽程度	5~6本	8~9本
小指以下の太さ	3~4芽程度	8~9本	12~13本

7. まとめ

剪定程度の強弱は、地力・施肥量・台木などにより異なるため、園の立地条件や樹の特性・生長量などを考慮しながら、整枝剪定を進めることが重要である。